

二度の国費留学で異文化を学ぶ。 「大学は生き物」…



くらた みのる
倉田 稔 教授

一般教育等 / 社会思想史・経済思想史

1969年 3月 慶應義塾大学大学院経済学研究科修了
1970年 4月 日本社会事業大学専任講師
1974年 4月 同 助教授
同 10月 小樽商科大学商学部助教授
1981年 3月 経済学博士（慶應義塾大学）
1981年10月 小樽商科大学商学部教授
1996年12月 小樽商科大学附属図書館長
（2000年3月まで）

先生はこの9月末で「商大生活、満30年」を迎えられる訳ですが、昨今の学生像に関してどのように感じていらっしゃいますか？

倉田：そうですね。学生さんたちは確かに変わりましたよね。良い悪いはともかく（良く変わったんだと思います）が、昔は授業中も私語ひとつせずシーンとして一生懸命でしたが、最近はそうではないですね。どうもその年ごとに波があるようで、要するに古典的な学生像は崩れましたね。

先生が赴任された頃（昭49）の商大はどんな風でしたか？ 学生運動が盛んな時代？

倉田：学生運動は終わっていました。でも（本学の）智明寮問題が残っており、当時、若い教官の私などは厚生委員として寮の学生たちと何度も話し合い（いわゆる団交）をしたものです。しかし、その一方で「やはり小樽高商の伝統を継承している大学」と感じたものです。教官数も少なかったし、60歳ぐらいの権威がある感じの教官が多かったですね。

先生の在外研究での思い出を御伺いしたい。留学先はたしかウィーン大学でしたよね。

倉田：初回は1976年から1978年にかけて、オーストリア政府の国費留学でした。自由に研究できましたし、とっても楽しく意義深い留学生活を送ることができました。向こうの大学生の生活の実態も知れたことが大きい成果でした。研究の目的として、「或る大思想

家（ヒルファーディング氏；ウィーン生まれの大経済学者）の、世界で一番詳しい伝記を書こう」と決め、その資料集めのためにウィーン中を革靴で歩き廻りました。実を申せば、アムステルダムで約1年半の間、彼の理論を勉強し終えた後に、今度は彼がその後の人生（半生）をどう送ったのかを調査・研究したくなってウィーンを択んだ訳です。そこでの研究生活が大変に面白かったし、すごく勉強になりました。それに、ウィーンはオペラやコンサートの本場ですから。料金も安く、立見席で200円でした。たくさんの友人もできましたし、彼らとホイリゲ（「今日」を意味する酒場）で新酒も味わう機会も多く、本当に恵まれていました。

地元「小樽」の街について、先生の率直なご感想を御伺いしたいのですが。

倉田：そうですね、「小樽っていうのはイイ街だな」と思っています、北海道では函館と小樽は古い建物を大切にしていますね。ただ綺麗な新しい建物があるというだけではつまらない。古い歴史的な建物がないとつまらないですね。その点でも小樽はイイ街ですよ。そして、小樽の街はモット商大を利用するべきだと思うんです。我々も小樽の街でいろいろな人と知り合いができて初めて、いろいろな所へ出て行くんだと思います。私は、呼ばれれば必ず出掛けていきます。

二度目の在外研究（留学）時のお話を伺いたいのですが。

倉田：二度目は日本政府による国費留

学でした。1990年から1991年までの1年間、やはりウィーンでの生活で、研究テーマは「ウィーンの現代史」としました。この時は一度目の留学の際に友達になった彼の家の一間に住む（無家賃）ことになって、彼のファミリーの一員に私が加わり、このお陰で「異国の文化を学ぶ」絶好の機会を得たわけです。春夏秋冬を通して市民の冠婚葬祭やら日常生活面での行動習慣を知ることができました。ウィーンの子ども社会や高齢者社会の実態を知れたことは、私にとって勉強になりました。

ではここで、「日本と欧州の大学生の違い」、また（大学の法人化による）「これからの大学の行く末」について先生のお考えをお聞かせ願えますか？

倉田：何と言っても「社会の仕組みの違い」があるので一概には言えないのですが、大学生の実態から言えることは、まずは向こうの学生さんは「勉強したいから大学へ」の思いが強く、自分の主義・主張がハッキリしている点でしょう。日常行動面での責任感が強いのが特徴的です。これに比べて日本の大学生には「単位をとり、卒業するために大学へ」の思いがあり、何事に対しても問題意識が足りないと感じます。モノを覚えるだけが勉強ではないということを知する必要があります。とは言うものの、日本ではたとえ自立していなくても生きていける社会ですからね。それに自分の考えを人に言わないのが「美德」であると思っていしている人が多いです。（次の質問ですが）日本の大学は、「法人化によって変わる」ことでしょう。「大学は生き物」です。どう時代に合わせていくか、また時代に合わせられずに死んでゆくかが問われると思います。

*倉田先生は、世界の社会思想家の研究を手広く進められる中、昨年12月、900ページにおよぶ大著『小林多喜二伝』（論創社）を出版されました。また、1996年12月～2000年3月までの約3年半の間、本学の附属図書館長を務められ、積極的に図書館のシステム改革に取り組みされました。今日ある図書館の発展ぶりは、先生の献身的な御力添えによるところが大きいといえます。